



▲蛭子神社の百度石



▲百度石の裏面に刻まれた碑文(拓本)

背景

徳島市南沖洲の蛭子神社境内に、百度石があります。百度石は、子どもが病気になった時や家族に不幸が訪れた時などに、願いがかなうようにお百度を踏む(100回お参りをする)際の起点となる石です。多くの方が何度も何度も目にする蛭子神社の百度石に、安政南海地震のことが記されていました。石の風化がひどく、今では判読できる碑文は限られていますが、「徳島市史」や「蛭子神社記」、「阿波における地震の研究」から碑文の内容が分かります。後世の人に津波の教訓を伝えたいという思いが伝わってきます。

アクセス 蛭子神社

- JR徳島駅より東へ直線距離約3.5km
- 徳島市南沖洲1-2
- 緯度経度 北緯34度03分59秒, 東経134度35分05秒



南海地震は、江戸時代以降でも、慶長九年(一六〇五)、宝永四年(一七〇七)、嘉永七年(一八五四)、昭和二十一年(一九四六)というように、周期的に起こってきました。この南海地震の周期性を後世に伝えるために、人々はさまざまな工夫をしてきました。

徳島市の蛭子神社では、百度石に南海地震の周期性が記されています。今日では石の劣化がひどく、判読できる碑文は限られていますが、以下のような内容が記されていました。

……嘉永七寅年十一月五日、大地震が起こりました。人々はうろたえて、木や竹の根が絡む藪の中に駆け込み、津波が来ると騒いでいました。舟に乗って流され、危ういところを助かる者もいれば、舟が転覆して命を失う者もありました。舟に乗ってはいけません。家が潰れて、こたつやかまどから出火して、多くの家や蔵が焼けてしまいました。こういう時には心を鎮め、火の元に気を付けることが大切です。ももとせ(百年)しないうちに、このような地震・津波がやってくると言われていました。……

「ももとせ(百年)を経ぬほどにはかような震瀟有り」と刻まれた碑文は、南海地震の周期的な発生を予測し、警鐘を鳴らしています。まさしく嘉永七年(一八五四)から百年経たない昭和二十一年(一九四六)に南海地震が起こり、昔からの言い伝えを尊重することの重要性を証明しています。



昭和二十一年（一九四六）の南海地震の時に、河川に浸入した津波の速さを徳島の津田で体験した人の話です。私は、当時徳島の津田で製材所を営んでいました。明け方、大きな地震がありました。とっさに「津波が来る」と思った私は、両親と妹たちをいそいで裏山へ避難させました。しかし、私はどうしても川につないである材木が心配でなりませんでした。材木の様子を確かめるために川へ出かけました。その時私は津波のすさまじさを目の当たりにすることになりました。

川の水はザーツともすこい勢いで海側の津田の防波堤の方まで引きました。普段なら五〇メートル以上もある川幅が、水が引いたせいで帯のようにわずか一間（約一・八メートル）に満たない川幅になりました。その後、引いた波はものすごい速さと勢いで川を逆流し始めました。その水の速さといったら、その頃の私が全力で走っても到底及ばない速さでした。

川につないであった材木は波にのまれてしまいました。とうとう津田橋の橋桁に材木が轟音とともに勢いよくぶつかり、その凄さに思わずウオツと唸ってしまいました。その後、津田に押し波、引き波が一〇回程度押し寄せているうちに、ついにつないであった綱は切れてしまい、その材木はバラバラになって点々と散らばってしまいました。

私は、材木を見届けると、家族を避難させた裏山に戻りました。そこには心配して私の帰りを待っていた家族がいました。私は、恐怖のあまり震えが止まりませんでした。

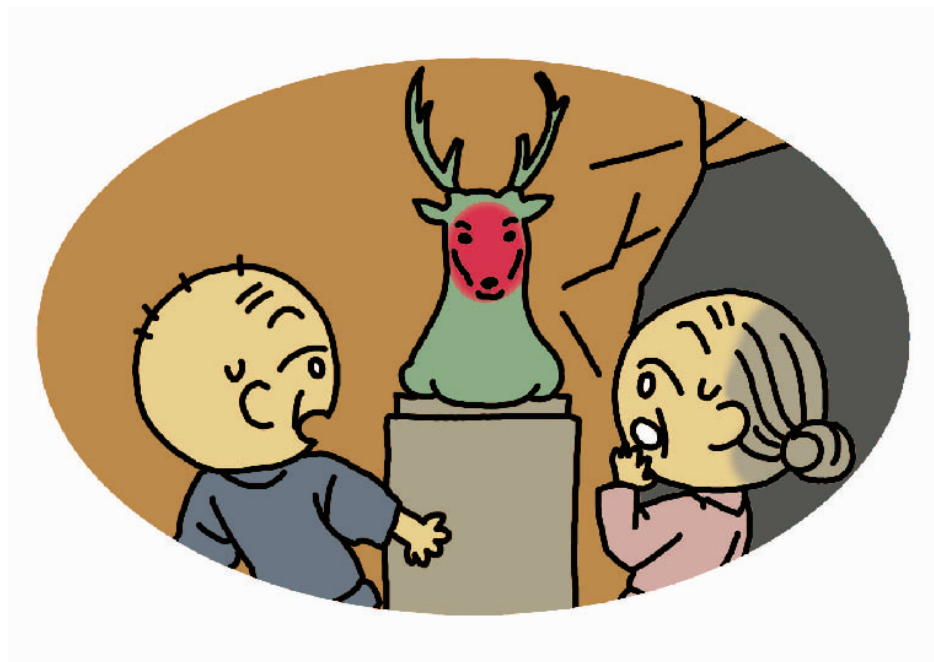


背景

津田は園瀬川と勝浦川に挟まれた中州にあたります。埋め立てが進んでいますが、いまでも木材工業団地になっており、前面の海域は貯木場になっています。津田山（標高78m）の津田八幡神社からは貯木場を一望することができます。

アクセス 大野大橋（園瀬川河口）

- JR徳島駅より南へ直線距離約3km
- 徳島市西新浜町
- 緯度経度 北緯34度02分42秒，東経134度33分19秒



背景

昔、徳島の津田の沖合いに浮かんでいた亀島かみぼつが陥没して海中に沈み、島から避難した人が徳島の福島の築地に移り住んだと伝えられています。亀島が海中に没したのは、大地震のためであると言われていますが、その地震の時期については、正平16年（1361）6月18日に起こった正平の大地震、安政南海地震（1854）など諸説があります。かつて島があった所は、今ではお亀磯と呼ばれて、暗礁の上に灯台が建てられています。

アクセス 沖洲港（亀磯灯台）

- JR徳島駅より東へ直線距離約5 km
- 徳島市東沖洲
- 緯度経度 北緯34度03分20秒，東経134度36分12秒



昔、徳島の津田から一里（約四キロメートル）ほど沖に亀島という小島が浮かんでいました。島にはたくさん漁師が住み、漁家が千軒あるということから、「お亀千軒」と呼ばれていました。島の中ほどに大きな洞穴があり、そこには神様をお祀りまつしていました。穴の前には銅で作った鹿が置かれていて、狛犬こまいぬのように神様の場所を守っていました。

この洞穴の近くに、信心深い爺さんと婆さんがいて、毎日お参りをしていました。ある晩のこと、夢枕に神様が立ちました。

「爺と婆よ、これからは、お参りする時には必ず鹿の面を見よ。もし鹿の面が赤くなるようなことがあれば、島が沈む前兆であるから、一刻も早く島を立ち退くように」

正直な爺さんと婆さんは、それ以来、毎日神様にお参りすることに鹿の面を見ていました。これを見て、一人の若者が夜中にそと鹿の面を紅殻べにがらで真っ赤に塗りました。夜が明けて、お参りに来た爺さんと婆さんは驚きました。

「島が沈む。はよう逃げないかん」と島中に知らせました。

その話を聞いて、急いで港を出る者もあり、その様子を見て面白がる者もいました。爺さんと婆さんは「もう島を出る者はいないか」と何度も呼びかけ、最後の舟に乗って島を離れていきました。しばらくすると、島が揺れ、高い波が島を被い、島は海の中に沈んでいきました。



昭和二十一年（一九四六）の南海地震の時に、川に泊めた船の中で泊まっていた人の体験談です。

新町川に泊めてある船が私の住まいである。その晩も私は船の上で眠っていた。明け方、船が大きく揺れた。「風もないのに、えらい波じゃの」その時、私は津波のことは少しも思いつかず、そのまま眠ってしまった。しばらくすると、「プツン」という音がした。船をつないであるロープが切れる音である。「只事ならぬことが起きている」咄嗟にそう思った私は慌てて外に飛び出した。私は、そこで想像を絶する光景を目の当たりにした。普段はほとんど流れのない川が上流へ激流となって流れているではないか。

私に乗せた船は、流れのなすがままに上流へ流されていった。「何が起きているのだ」私の頭は混乱していた。ようやくかちどき橋に船の上の部分がひっかかって止まった。ところが、次から次へと流されてくる船が、かちどき橋でだんご状態になりはじめた。私はかちどき橋が落ちるのではないかと不安になり、船につないであった小さな舟に飛び移り岸へ逃げようと思った。しかし、小さい舟はすぐに波に覆われ沈みそうになった。私は急いで、大きい船に飛び乗った。その瞬間、小さい舟は、流れてきた木材に押しつぶされて、「バリバリ」と音を立てて沈んでしまった。

呆然とばらばらになった小舟の破片を眺めると「ミシミシ」という音が聞こえてきた。今度は飛び乗ったこちらの大きな船も、他の船に押しつぶされそうである。「もう駄目だ」と思った時、三トンのはしけ船が私の船に突っ込んで来た。私は慌ててはしけ船へ綱を伝って上がり、はしけ船からかちどき橋に上がり川岸にたどりつくことができた。

背景

かちどき橋は、徳島市街地を流れる新町川にかかっている橋で、昭和16年（1941）に完成しました。この橋の南詰めの交差点は、徳島と松山を結ぶ国道11号の起点にもなっています。また、昔は新町川には多くの船が係留され、沖合いには貯木場があり、周辺から集められた材木がいかだを組んで保管されていました。

船に乗っている時は地震の揺れが分からないので、津波の発生には注意が必要です。

アクセス かちどき橋（新町川）

- JR徳島駅より南東へ直線距離約1 km
- 徳島市中州町
- 緯度経度 北緯34度04分01秒，東経134度33分25秒





背景

徳島県南部、高知県西南部、愛媛県南部などのリアス式海岸に見られるV字型の入江では、他の地域よりも地震後の津波が大きくなることが想定されます。このことから、「地震後は早く、高い所に避難すること」が導き出されます。このような経験や言い伝えから学んだことを後世の人に伝えることは重要なことです。この話は、阿南市見能林^{みのばやし}に嫁いだ女性が義父から教えられた地震後の心構えを大切にしたいために、津波から家族みんなの身を守ることができたという体験談です。

アクセス

船の打ちあがった付近（打樋川）

- JR見能林駅より南南西へ直線距離約1.5km
- 阿南市見能林町
- 緯度経度 北緯33度53分20秒，東経134度39分50秒



昭和二年（一九四六）一月二日未明の南海地震の時のことです。グラッ！グラッ！突然襲った地震に、私は今まで経験したことのない大きな衝撃を受け、ただならぬ危険を身感じました。津波が来る、必ず津波がやって来ると思いました。私は子どもたちを素早く戸外へ連れ出し、モチの木に皆でかかえつきました。早くどこか高い所へ避難しなければと思い、家族に身仕度をさせ、塩・味噌・米など非常食品を持って、近所の高いお家に避難させてもらいました。

その直後、暗闇の中に、津波の轟音^{ごうおん}が聞こえてきました。時間がたち、夜も明け、私たちが家へ帰って来たところ、家、家具、収穫したばかりのお米など、ありとあらゆる物すべてが泥まみれとなり、眼も当てられぬ有様でした。また、家の前の道路には、二〇〇トン級の船が打ち上がっていました。

時間が経つにしたがつて、お隣の人も、避難先から帰って来て、無事であったことを共に喜び合いました。こうした未曾有^{みそろう}の出来事の中に、一人の怪我^{けが}人も出なかったことは、今は亡き父の日頃の教訓のお蔭なのです。

私がこの家へ嫁^{よめ}いで来た時、父からくれぐれも次のことを注意されました。この土地は前が海であり、ましてV字型の入江であるので、もし地震があった時は、必ず津波が来ると思い、高い所へ避難すること、他の地域より潮位が高くなること、また戸外へ出たら、木の根元に避難することです。これはこの地方は沼地であるため地盤が軟弱なので地割れの心配があるそうで、この注意はお隣の人たちにもいつも言っていました。こうした年長者のちょっとした注意や言い伝えは、若い世代へ言い残しておきたいものです。

敗戦から間もない昭和二十二年（一九四六）の南海地震により、敗戦、地震、津波の三重苦を体験した人の話です。

「津波を知る人がいなくなった頃、津波が来る」と祖母から聞かされていました。昭和二十一年一月二日未明、不気味な地鳴りとともに大地震が起り、家を飛び出しました。焚き火で暖をとっていると、大波が国道を越え、怒濤渦巻きながらいろいろな物を運んできました。隣の納屋も木の葉のように猛スピードで流れていき、国道や堤防が次々と切断され崩壊していききました。浜田は泥沼の海になりました。それはほんの一瞬の出来事でした。地震や津波の計り知れない自然のエネルギーを前に、私はただ茫然と眺めるだけで、放心状態でした。

鵜地区が地震によって受けた致命的被害は、地盤沈下です。南海地震によって室戸岬付近が隆起し、他は全般的に沈降しました。海水の高さから考えると、地震前より五〇センチメートル位沈下したと言われていました。

沈下分を取り戻す嵩上げ工事が始まりました。まず、嵩上げに使う土を得るため、山へ行ってスコップによって表土を取り除き、山土をツルハシで掘ります。そして土を大八車で運搬するという、現代では考えられない全て人力の作業であり、その上寒中の氷が張る水中での作業で、本当に大変でした。

工事は昭和二八年（一九五三）頃まで続きましたが、沈下分を取り戻すことはできませんでした。以後、何年にもわたり何回も嵩上げ工事が繰り返され、農家の労力に加え、精神的、経済的負担はあまりにも大きく、長い間本当に苦しみました。



背景

阿南市鵜地区はV字型をした橘湾の湾奥部、福井川の河口に位置し、地震が発生すると、津波が猛烈な勢いで襲ってくる地形となっています。昭和二十一年（一九四六）の南海地震の時にも、この地に津波が大きな被害をもたらしました。その中でも深刻な被害は地盤沈下でした。地盤を元の高さに戻すため、地域の人々は人海戦術で大変な苦勞をしながら嵩上げ工事を行いました。

アクセス 鵜橋（鵜川河口）

- JR新野駅より北東へ直線距離約3km
- 阿南市橘町鵜
- 緯度経度 北緯33度51分26秒、東経134度37分38秒





昭和二十一年（一九四六）の南海地震後、私はすぐに服を来て階下に下りました。まもなく母や祖母が妹や弟たちに服を着せ終わりと、皆玄関の部屋に集まりました。玄関口の板間には収穫し乾燥を終えたばかりの籾を入れたかますが並べられていました。その頃は食糧難の時代で、母と祖母は「これを二階に上げると逃げよう」と言いました。その時です。外から伯母が雨戸を叩いて「津波が来るぞ、はよう逃げえよ」と声をかけ、足早に走り去っていきました。

母から「子供らは先に逃げとれ」と言われ、私が入り口の障子を開けた途端にドーン、ザーという音とともに、雨戸と雨戸の隙間からいつせいに海水が吹き出してきました。「みな早う二階に上がれ」と言う祖母の声に、母は籾の一杯詰まったかますを持って階段を駆け上り、みんなも続きました。

階下の様子を見に行った母は「階段の上近くまで波が来とる」と言う。祖母は「もうあかんやわからん。死ぬんやたらみんな一緒や」と言つて、七人が輪になって手を握り合いました。

真つ暗な中で、ドーン、ドドーンと家に何かが打ち当たる音が数回続いて聞こえた瞬間、突然家が崩れるように倒れ、家に押し潰されるようにしてみんなが水中に押し込まれました。

近くにいたはずの家族の姿は一人も見えず、無我夢中で水の中をさぐり、手に触ったものを引っ張り上げました。弟や妹たち三人は間近におり、祖母も少し離れて浮き上がっていましたが、母と叔母の姿は見当りませんでした。

あの時に欲を捨てて、すぐに逃げていればと今までに悔やまれます。

背景

昭和21年（1946）の南海地震と津波は牟岐町に大きな被害をもたらしました。当時は食糧難の時代で、収穫し終えた後の籾は貴重なものでした。この話は、籾を入れたかますを二階に上げてから逃げようとしたために、母と叔母を亡くした家族の話です。地震後、津波に備えて、一刻も早く逃げていれば、二人の命は救われていたかも知れません。

アクセス 南海震災史碑

- JR牟岐駅より南東へ直線距離で約1 km
- 牟岐町灘字大牟岐田 児童公園内
- 緯度経度 北緯33度39分59秒、東経134度25分39秒





背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時19分、マグニチュード8.0の南海地震が発生しました。海陽町の浅川湾は典型的なV字型湾で、地震発生から十数分後には大津波が来襲し、死者85名、家屋の全壊364戸、流失44戸などの被害をこうむりました。この話は、持ち物を準備していたことから逃げ遅れ、津波が押し寄せる中を逃げた家族の話です。浅川港には「お母ちゃん行けんもん」の石碑が建立され、この時の教訓を後世に伝えています。

アクセス

震災後50年南海道地震津波史碑

- 海陽町浅川出張所前
- 海陽町浅川字川ヨリ東26-4
- 緯度経度 北緯33度37分29秒、東経134度21分46秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震で二人の子を亡くした母親の体験談です。

地震が揺ったさかい、「もうやむんかいな」、「家がつぶれるんちやうかいな」ほんなことばかり考えながら部屋で子供に添え乳させよった。おとうさんが、「井戸の水もようけ有るし、浜へ行ったけど誰っちゃおらんわ。静かなもんじゃわ」と言う。おては（私は）あわせ 裕あわせの着物を何枚か持ち、「ちよつとでも食べる物持っていたろ」思つて、袋に米入れて出て行きかけた。

ほいたところが、近所は、皆逃げてしてもおらんのもん。ほんで、びっくりしてお隣さんに早よう逃げるよう言うたつて出て来たら、うちの前にはまだ水がなかったけど、駒沢の前へ行ったらもう水がザブザブしとつて胸まで上がつてきた。それが一番最初の潮やつたんや。持つていつきよつた物はみんな駒沢の前で捨ててしもた。

長女が四女を負うて行つてきよたんやけど、「おかあちゃん行けんもん」言うやろ。行けんはずや、柴から材木から道具からが、じょうさん（たくさん）流れてきとんやもん。暗いし、いろんな物は流れてきよるし、あとへ戻つたること、どうする事もできん。

ほの後の波に乗つて次女と三女は駒沢の屋根に上がつて助かつた。長女は四女を負うとるし、ねんねがびしょびしょになつとるから、からだか重とうてよう上がらんかつたんやろ。

潮が干いて町へ出て行くと「ばあやん、おめくの（あなたの家の）子が死んどるで」言うやんけ。長女と四女が西の町で死んどつた。下の子はねんねこから抜けて、二人が近くで死んどつた。おて（私）が行つた時には、もうお寺に運ばれとつた。「この子らを熱いお風呂に入れたつたら生き返るんちやうかいな」と思つたら入れてやりたくてたまらなんだ。一度に子供を二人も失うてもうた。



▲観音庵への階段



▲安政南海地震 津波来襲地点の石標



◀昭和南海地震 津波来襲地点の石標

背景

昭和21年（1946）の南海地震の時に、自宅とは別の旅館で宿泊客の世話をしていた夫が、妻と子どもたちの安否を気遣い、浅川の自宅付近に戻りました。子どもたちは無事山に避難していましたが、妻は亡くなっていました。一旦、家から逃げたものの、荷物を取りに帰ってきて津波にのまれたようです。この話は妻を亡くした夫が語る体験談で、地震の後は早く逃げるのが大事だと言っています。

アクセス 観音庵

- 海陽町浅川出張所より北へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度 北緯33度37分37秒，東経134度21分42秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震で妻を亡くした夫の体験談です。

地震の時、わしの旅館にはちょうど森繁久彌さんが来とって、二階で寝よった。森繁さんに「ここで夜が明けるまで動かれんぞ。わし、帰るわ」言うて、浅川の自宅に自転車で向かった。浅川の端へ来たら、ドーと波が来て、大きな貨物船や機帆船きはんせんが流れてきよった。それが一番最後の潮やった。夜を明かし、胸まで水に浸かってようやく自宅にたどり着いた。

家の辺りは流れてしもとった。わしは子供を捜した。無事山へ逃げとった。「お母さんはどうしたんな」と聞いたら、「お母さん見えん」という。「もしかしたら、やられとるかも分からん」と思うて下へ降りたら、いとこが「おまえくのお母さんみたいな人が死んどる」いうて初めて分かった。浜にようけ積んであつた材木がどつと流れて来て、家内はそれに足をとられて死んどった。逃げる時、上の子が下の子を負うて家内も一緒に逃げたんやけど責任感の強い女で、「おとうさんもおらんし、こら子供のもん持って逃げとらないかん」思つてもどつて来たんやろ。

ここの人は天神さんに逃げたんやけど、三回か四回波がきた。天神さんの石段の一番上まで波がきとつた。津波というもんは、浜で渦のようにまうもんらしい。ほれに、二階建ちの家が下をとられてしもて、そのまま二階がパタンと落ちてしもたり、えらいもんやな。

あんな大きい地震や津波の時は、「はよう逃げ、はよう逃げ」いうたらないかんけど、中には「こんな所まで津波が来るか」いう人もおる。ほんやけど、そんな時は素直に人のいうことを聞いて逃げるがええんではないかと思う。



私は、物心がついた幼少の頃から高校生になる頃まで、両親から、寝る時には必ずズボンや服などを折りたたんで枕元に置き、いつでも着て逃げられるようにしておくように、しつこく言われ続けてきました。それは、両親が昭和の南海地震で次のような体験をしたことに基づいた教えでした。

「……昭和二十二年二月二日、今まで経験したことのないドーンという音とともに、大きな縦揺れで目が覚めた。すぐに大きな横揺れで家がぐらぐらと揺れ始め、タンスは倒れ、家中の物が落ち、今にも家が倒壊しそうになった。海からはゴート、今までに聞いたことのない不気味で大きな音が聞こえてきた。外からは「津波だ、早く山に逃げる」と怒鳴り声が聞こえた。着の身着のまま外に出ると、屋根瓦の落ちる音、家屋の崩れる音があちこちから聞こえてきた。

荷物を持ち出す時間も余裕もなく、また避難する人々でパニック状態の中、三ヶ月の乳飲み子と三歳の子どもを抱きかかえ、また後には四人の子どもを従え、暗闇の中を近くのけわしい山道を必死に駆け上がって避難したが、どこをどのように避難したのかはほとんど記憶がない。

百メートルほど登ってやっと我に返ったが、恐怖と寒さのため体の震えが止まらない。しばらくは話すことも立つこともできなかった。……」

南海地震を経験した両親の貴重な教えを無にしないように、この話は子や孫にも語り継ぎたいと思っています。

昭和三〇年代以前

背景

昭和21年（1946）の南海地震を体験した両親は、その時の様子と教訓を子どもに伝えていました。災害体験やそれに基づく教訓は、語られなければ風化してしまいます。教えを思い出し、実行することにより、両親の思いは子に、孫に伝えられていきます。この話は、親など身近な人が、災害体験を後世に伝えることの大切さを物語っています。

アクセス 津波十訓の石碑

- 海陽町浅川出張所より南西へ約200m
- 海陽町浅川
- 緯度経度 北緯33度37分24秒、東経134度21分41秒



徳島県の南端、海陽町ししくい穴喰の田井家には、この地の過去の地震や津波の様子を記した「しんちようき震潮記」が残されています。その一端を紹介します。

…嘉永七年(一八五四)十一月四日の午前九時、中揺りの地震が続いて二度あり、海面にわかには大波が立ち、あじ島を打ち越えて、川の中ほどまで潮が三度入ってきました。

人々は大変驚いて四方へ逃げ散りました。米麦や諸道具を山上へ持ち運び、今にも津波が襲って来る心地がして、大騒動となりました。

夜に入ってから同じ騒ぎは続きました。万一、出火するかも知れないので、役人達は火の用心の警戒に回り、浜辺ではかがり火を焚いて、潮に異変があったならば、知らせるよう手配しておきました。家々に残っている者たちは、知らせがあれば少しづつ身の回りの物を持って、あたらやま愛宕山へ逃げのぼるという覚悟で、浜辺より今にも知らせが来るかと心細くも待っていました。そこへ、夜一〇時ごろ中揺りの地震が一度ありました。

家々に残っていた者も大半は逃げ去り、道具も持ち運び騒々しくなりました。また、浜辺には潮の異変に気を付け、かがり火を焚いており、あちこちに逃げ退いていた者は、かがり火が消えたならば、津波が押し寄せて来ると思って、本当に薄氷を踏むような思いで心細く、遠見から見守っていました。

明け方になって、一息つき、翌五日、潮の異変も少しばかりは直り、地震も穏やかになったので、あちこち逃げていた人々は、諸物を持っておいおい戻ってくるような状態で、これで少しは穏やかになりました。……



震潮記▶

背景

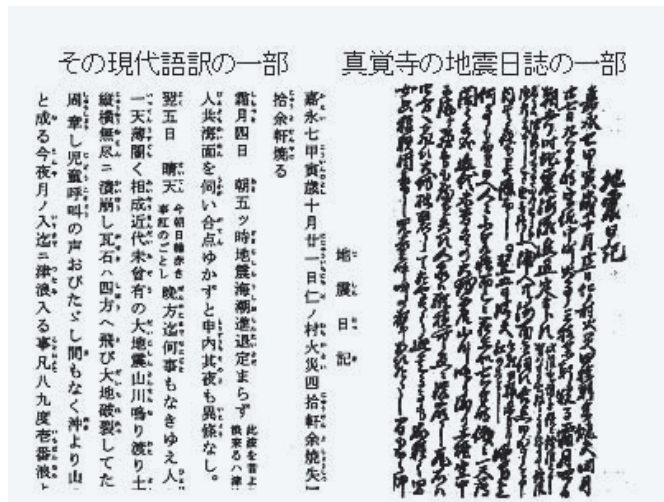
「震潮記」は、ししくい穴喰の組頭庄屋田井久左衛門宣辰(1802~1874)が、穴喰を襲った地震・津波の様子を記したものです。この中には、永正9年(1512)、慶長9年(1605)、宝永4年(1707)、嘉永7年(1854)の記録が記されています。平成18年には、子孫の田井晴代氏はるよが津波時の救命の一助になればとの思いで、現代語訳を刊行されました。ここでの話は、「嘉永七年十一月五日震潮日々あらましの記」より、津波に備えて昔の人がかがり火を焚いたなど多くの教訓が述べられています。

アクセス 愛宕神社

- JR穴喰駅より東南東へ直線距離で約200m
- 海陽町穴喰浦
- 緯度経度 北緯33度33分55秒, 東経134度18分09秒



江戸



▲真覚寺日記解説書



宇佐湾を望む真覚寺▶

背景

高知県の真覚寺には、「地震日記」九巻と「晴雨日記」五巻からなる「真覚寺日記」が保存されています。これは、当時の住職であった井上静照師が、安政東海地震が起こった嘉永7年(1854)11月4日から慶応4年(1868)までの15年間にわたって記した日記です。ここでは、嘉永7年11月5日に起こった安政南海地震に関する記述を現代語訳にして概要を示しています。

アクセス 真覚寺

- 宇佐漁港より東北東へ直線距離約200m
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度 北緯33度27分10秒, 東経133度27分13秒



嘉永七年(安政元年・一八五四)十一月四日の安政東海地震発生翌日、五日の安政南海地震の土佐市宇佐町の様子が真覚寺の住職の日記に次の様に記されています。

翌五日晴天。今朝は太陽がまるで紅のように赤い。晩方まで何事ありませんでしたが、午後五時頃にわかに空が薄暗くなり、未曾有の大地震が山川に鳴り渡り、土煙が空中にまん延し、飛ぶ鳥も度を失いました。人家は縦横無尽に崩れ、瓦は四方に飛び、大地は破裂して容易に逃げることもできず、男女はただ狼狽し、子どもは泣き叫びました。

間もなく沖から山のような大波がやって来て、宇佐、福島一面が海となりました。今夜月の入りまでに津波がおおよそ九度押し寄せ、一番目の波から二番、三番の引き潮で浦中がみな流されました。総じて地震の時の潮は、進むときは緩やかで、引く時は急です。福島と中須賀の間は家が一軒も残らず、渭ノ浜の山際まで波が入っていききました。宇佐は流れ、残った家はわずかに六〇軒であり、このうち二〇数軒を除いては、家は残っているものの、修繕はできないほどになりました。

波が来た時に、諸道具を捨て置き山に逃げた人はみな命が助かり、金銀雑具に目をかけ油断した者はことごとく溺死しました。流死した人は福島で五〇余人、宇佐で一〇余人に及びました。



▲津波の洗礼を受けた宇佐湾

昔から大小何回かの津波の洗礼を受けてきた宇佐では、先人がその経験を通してつかみとった尊い教訓を残してくれています。安政の大地震の時の津波は、波頭なみがしらが萩谷の入り口まで来たということから、その地に記念碑が建てられています。その碑文の中にこう記されています。

「昔宝永の変にも油断の者 夥敷おびただしく流死の由、今度もその遺談を信じ取りあえず山手へ逃登る者、皆恙つつがなく、衣食等調度し又は狼狽して船にのりなどせるは流死の数を免れず可哀哉」(昔、宝永地震の時に油断した者が溺死しました。今回の安政地震でも、昔の話を信じて山に逃げ登った者は無事でしたが、衣類、食料などを気にかけて逃げ遅れた者や慌てて船で逃げようとした者などは溺死しました。ああかわいそうな話です)

過去の体験から、津波の時にはまっしぐらに山へ逃げよという教えが宇佐では言い伝えられています。このことが、昭和地震でも活かされて、他の地域に比べて宇佐では死者が少なかったという結果につながっています。



背景

昭和21年(1946)の南海地震後の津波は、土佐市の宇佐地区に壊滅的な被害をもたらしました。津波の害を受けない者は一人もいないと言われるほど大きな被害でした。しかし、宇佐町の被害には、他の地域と比べて特色がありました。それは死者が少なかったということです。その理由は、津波を経験した昔の人たちが後世に尊い教訓を残してくれているからだと言われています。

アクセス 安政地震の碑

- 宇佐漁港より西北西へ直線距離約1km
- 土佐市宇佐町宇佐萩谷地区
- 緯度経度 北緯33度27分20秒, 東経133度26分17秒





昭和南海地震の当時、土佐市宇佐町に住んでいた人の体験談に基づく話です。

とにかく凄^{すご}い揺れでした。前の空き地へ一斉に飛び出しましたが、身動きが取れません。家族全員が身体を支え合って、必死に耐えて地震をやり過ごしました。やがて激しい揺れも治まり、私たちは家へ入りホッととしたのも束の間、下の弟が突然「直ぐに津波が来る。早く逃げんと大変なことになる!」と、私たちに避難を促^{うなが}しました。母も私も津波への危機意識は全くなく、「えっ、なんで?」と疑心暗鬼^{ぎしんあんき}の状態でしたが、弟は委細^{いさい}構わず行李^{こうり}を持って来て、「早く、この中へ大事な物を入れて」と急かします。「お母ちゃん、何を入れようかね」母も私もたんすの前でただオロオロするばかりでした。「早よう家を出ないかん」必死の弟に急かされて、結局、着の身着のまま家を後にしました。

近くの山への避難は、弟の機転で私たちが一番でした。その後、近所の人たちも続々と避難して来ましたが、皆、大慌てで私たち同様、着の身着のままです。余程慌てたらしく、素足の人、左右の履物^{はきもの}が違う人、と混乱していました。特に驚きましたのは、最後の最後に避難して来た人たちのズボンや着物、モンペの裾部分が一樣に海水に濡れていました。聞くと「津波に追いかけられた」とのことでした。まさに間一髪のところ

で、津波の来襲^{らいしゅう}から逃れた人たちでした。

背景

昭和21年(1946)南海地震後に、逃げ遅れたため津波に襲われて亡くなった人が多数いましたが、地震後に「早く逃げんと大変なことになる」という弟の言葉に従ったために、津波被害を免れた家族もいました。高知市春野町の仁西郵便局^{にさい}では、昭和南海地震の体験を風化させまいと、地域の人々から体験談を聞いて、とりまとめています。この話は、当時21歳だった女性の証言をもとにしています。

アクセス 震災復興記念碑

- 宇佐漁協前
- 土佐市宇佐町宇佐
- 緯度経度 北緯33度27分01秒, 東経133度26分33秒





背景

宝永4年(1707)10月4日、日本最大級の宝永地震が発生しました。津波が紀伊半島から九州までの太平洋沿岸などを襲い、死者は2万人に達したと言われています。この中で津波の被害は土佐が最大でした。須崎では八幡神社のみこしが津波に流され、太平洋を漂流して伊豆に流れ着きました。八幡神社の木札には、宝永津波やその後の様子やみこしが伊豆に流されたことなど、また、みこしが返還された時の送り状が記されています。

アクセス 須崎八幡神社

- JR須崎駅より南西へ直線距離約1km
- 須崎市南古市町
- 緯度経度 北緯33度23分21秒, 東経133度17分10秒



宝永四年(一七〇七)一〇月四日の大地震による津波で、須崎の八幡宮は水深四メートル以上となり、社の大部分は水中に没し、倒壊しました。このため、神社のみこしが潮の流れに乗って太平洋を漂い、流れ流れて五日目の一〇月八日に伊豆の岩地に打ち上げられました。

土地の人が見つけ、遠く須崎八幡宮のものであることが分かりました。みこしは村人と神官が丁重に祭り、保管されていました。須崎八幡宮がこのことを知ったとしても、津波による大きな痛手を受けており、数百里も離れた伊豆までみこしを受け取りに行くことは困難だったことでしょう。

安田浦の回船業の長左衛門がこれを聞き、伊豆の岩地に廻船し、みこしを須崎にお返し願いたいと申し入れました。村人と相談した神官は、おみくじにより神意をお伺いしたところ、ご帰国したいお告げが出たそうです。

そこで、長左衛門は、別れを惜しむ村人や神官の了承を得て、船に積み込み、宝永五年六月四日に伊豆を出航し、鳥羽港(三重県)に着きました。鳥羽港で志和浦の回船業の弥一兵衛の船に積み替えられて、六月一五日に須崎八幡宮宛の送り状が添えられて、みこしは須崎に向けて出航しました。

みこしが須崎八幡宮に正式に受け入れ奉納されたのは、その年の九月一日のことでした。



▲むかしから津波被害を受けてきた須崎湾

背景

須崎市に「宝永津浪溺死之塚」という石碑が建っています。安政南海地震の2年後の安政3年(1856)につくられたものです。宝永元年(1704)の宝永地震津波で亡くなった400人余の亡骸を改葬する際に、150年忌を記念して建立されたものです。作者の古屋尉助という人は、この石碑に地震津波に遭遇した時の心構え、教訓などを記しています。

アクセス 宝永津浪溺死之塚

- JR須崎駅より西へ直線距離約1km(お馬神社すぐ南)
- 須崎市西糺町
- 緯度経度 北緯33度23分42秒, 東経133度17分03秒

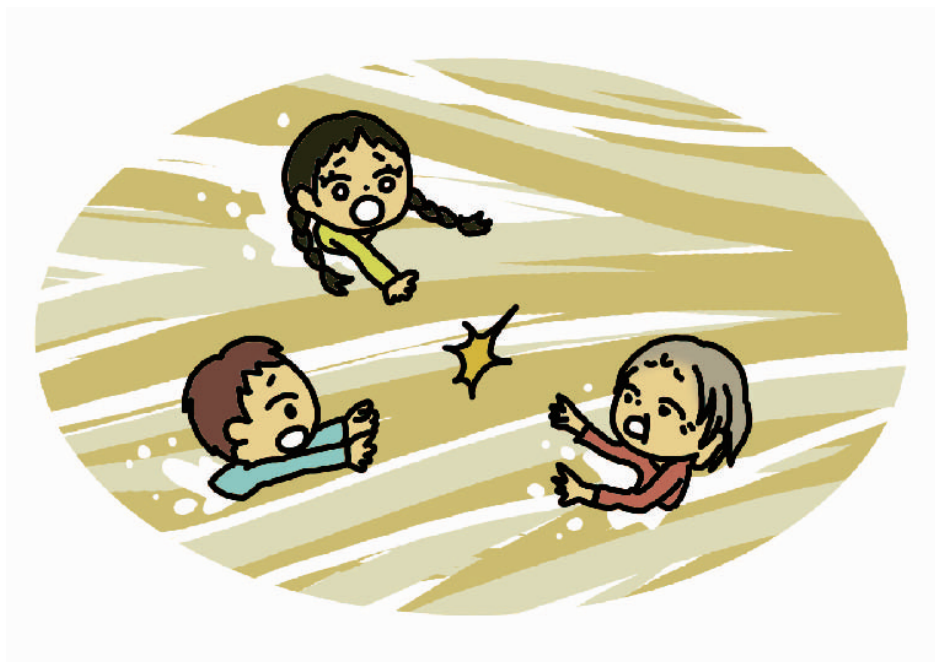


「宝永津浪溺死之塚」には、後世の人が津波被害に遭わないように、以下のような内容が記されています。宝永津波の犠牲者の一五〇年忌を準備している最中に、安政南海地震が起こりました。人々は宝永地震の津波のことを知っていたので、我先に山林に避難しました。このため、安政南海地震の時には昔のように津波の犠牲者を出さずに済みました。ただ、船で避難しようとして、津波で転覆して三〇余人が亡くなったことは痛ましいことです。

なぜ津波の時に船で避難しようとしたのかというと、昔からの言い伝えの中に、山に登ろうとして石に当たれて亡くなったという話や、沖に出た人が無事帰ってきたという話があり、それを間違って解釈したためです。津波が来る前に早く沖に出るのなら安全だったでしょうが、地震にあつた後に船出をすることは危険なことです。

地震が起きたら津波があると考え、油断してはいけません。しかし、地震が起きたらすぐに津波が来るというものではありません。(注:この記述は間違いであり、地震後すぐに津波が来ると考えるべきです。)少し間があるので、揺れの様子を見計らいながら、食べ物、衣類等の用意をして、石の落ちてこない高所を選んで逃げることです。その時も山の頂上まで登る必要はありません。今回の津波でも古市神母の辺りでは屋敷に水は入らなかったし、昔の津波でも伊勢が松で数人助かったと言われています。津波と言ってもそれほど高いものではありません。

一五〇年に二度も同じようなことが起こったのだから、考えないといけません。将来もこのようなことが起こると考えなくてははいけません。後世同じようなことに遭遇する人の心得になればと思います、みんなで議論してこの石碑を建て、そのことを記して下さい、と私はお願いしたのです。そこで私はおおよそのことをこの石碑に書き記したのです。



背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎ、南海地震が発生し、地震発生後10分ほどで須崎湾に津波が押し寄せたようです。その津波の速度は時速25kmにもなったと言われています。津波の到来に逃げ遅れた人々は流木などが流れる中を逃げまどい、須崎で40余名の犠牲者を出しました。この話は、地震後逃げるのが遅くなったため、子ども二人を老母に預けて先に逃げるようにしたところ、三人が津波に襲われ、辛うじて老母と弟は助かったものの、6歳の長女を亡くした父親の話です。

アクセス 津波之碑（須崎橋）

- JR須崎駅より南へ約300m
- 須崎市新町
- 緯度経度 北緯33度23分27秒、東経133度17分37秒



昭和二十一年（一九四六）の南海地震を体験した人の話です。

歳もおし迫ったあの日、午前四時頃、まだあたりは暗い。震動はなかなか止まりません。寝ていた老人、子供を大声で起こしました。やがてどこかで「おーい津波ぞー。逃げよー」と叫ぶ声、今考えると貴い言葉でした。

私たちは寒さをしのぐため、まず衣服を探して身に着けていました。その間に、刻々時はたつていきました。子供二人を老母につけて、一足先に家を出し北に向け、城山公園へ逃げるようにしました。

私たちも時を移さず後を追いましたが、三〇メートル位北へ行っただけ、北の方からゴーゴーと大きな音をたてながら、津波らしい大波がやってきました。急流のような波は、膝から腰、腹、胸へと、どんどん深くなりました。これでは押し流されて溺れるかも知れないと方向をかえて西向けに、屋根へはい上がり、軒から軒へと伝い渡り、ようやく公園の登り口までたどり着きました。

「母と子供はどうなったか」と気が気ではありません。やがて、夜が明け、波も引き去り、山を下りました。幸いに母と長男は驚きと悲しみと寒さにふるえながらも帰っていました。三人は家を出た後、津波に見舞われ、つないでいた手は断たれて間もなくばらばらになったそうです。長男は近くの電柱につかまっていたところを隣の人に助けられ、母は屋根にかけ上がり潮の引くのを待っていました。しかし、長女はどこへ行っただか分かりません。

途方に暮れて重い足を引かず家に戻り、家財道具を動かしていると、土間の箱の下に長女の哀れな悲しい姿がありました。思わず抱き上げましたが、もう冷たくなっていました。「皆いっしょに出かけたら、こんなことにならなかったのに」と、ただ止めどなく涙があふれてきました。



昭和二十一年（一九四六）当時、女学生だった人の記録に基づく話です。

ふと目が覚めました。置時計を見ると、四時でした。「まだ早いな」と思いながら、またうとうとし始めました。ガタガタと障子のゆらぐ音がして、少し揺れました。「地震だ」と直感したとき、ふすま越しに兄が「起きているか」と言っ、庭に面したガラス戸を開け、外に出た気配がしました。少し心細くなって、私もついて外に出ました。寒かったので、思わず一枚の布団をかぶって出ました。

兄の傍まで行った時、突然大きな地の底からのような鳴動がして、大揺れが来しました。揺れはだんだんひどくなり、兄と抱き合ったまま地面に投げ出されました。足をすくわれ転がされたような感じでした。畑の中へころがりこみ、二人で頭から布団をかぶりしました。この世の終わりかとはばかり思われて生きた心地がしませんでした。

気がつくと、辺りはまた元の静けさに戻っていました。「あつ」と思わず声をあげました。私たちを呼ぶ母の声に駆け寄り、三人で一枚の布団にくるまりました。

「これで火事さえなかったら」と言っている近所の人に、あいづちを打っていた時、突然近くから火事が起こりました。火はみるみる広がりました。親を呼ぶ子、子を探す親、火の回りが早いため救出できず生きながら火にまかれ焼け死んだ人など、本当にこの世の地獄でした。

母をかばいながら、安全な場所に避難しました。ようやく明けかけた町の姿は、昨日までとは全く違い無残な光景でした。

背景

昭和21年（1946）12月21日午前4時過ぎ、大地震が地盤の軟弱な中村のまちを襲いました。当時の全町2千余の家屋のほとんどを全半壊させ、夜明けまでに町は廃墟となりました。間もなく町中から燃え上がった火の手が拡大し、町並みを焼き払いました。渡川鉄橋も両端を残して墜落して、中村の町は壊滅に近い状態になりました。この話は、当時、女学生だった人の記録に基づくものです。

アクセス

南海地震碑

- 土佐くろしお鉄道中村駅より北西へ直線距離約3 km
- 四万十市中村 為松公園内
- 緯度経度 北緯32度59分49秒，東経132度55分47秒





▲南海地震で落橋した渡川鉄橋 (提供：四万十市)

背景

昭和21年 (1946) 12月21日午前4時過ぎ、突如襲った大地震とその後の火災は、中村のまちに壊滅的な被害をもたらしました。旧中村市の被害状況は、死者・行方不明者291人、負傷者1,065人、家屋の全壊1,919戸、半壊1,372戸、焼失163戸に及びました。人々は、中村の町は再起不能かと思うほどだったと言われています。

アクセス 赤鉄橋 (四万十川)

- 土佐くろしお鉄道中村駅より西北西へ直線距離約2km
- 四万十市中村
- 緯度経度 北緯32度59分24秒, 東経132度55分40秒



昭和南海地震は、中村一万町民の暁の夢を破り、恐怖のどん底につき落としました。また、揺れる暗黒の家からようやく戸外に逃れ出た人々を霜の上にコロコロと転がし、怒濤のような物凄い音をたてて、全町二千余の家屋をほとんど全半壊させました。もうもうとたちこめた土煙は救いを求める悲痛の叫びを呑み込み、一瞬のうちに町を修羅の巷とさせ、夜明けまでには完全に町を廃墟にしてしまいました。

まだ明けやらぬ地震直後、あちこちで人家が火を発して人々を狼狽させましたが、いずれも周囲に空き地があつて他への類焼を免れ鎮火しました。しかし、間もなく町中から燃え上がった火の手はみるみるうちに家々に燃え移り、猛火となって凄惨な光景を呈し、計六十余戸を焼き払ってようやく鎮火しました。

白日のもとに見る中村市街地は何と悲惨な光景だったことでしょうか。焼け跡からはもうもうと煙が上がリ、町中のほとんどの家屋が全壊、半壊の状態でした。国民学校なども無惨に倒壊し、渡川鉄橋 (通称赤鉄橋) もトラス部分八径間のうち、両端を残して六径間が落橋していました。

中村は再起不能かというのが人々の実感でした。



宝永南海地震の津波高を表示している大島小学校

背景

嘉永7年(1854)11月5日の大地震は、この年が甲寅きのえとらの年であるため「寅の大変」と言われ、また11月27日に改元されて安政元年となったため「安政の南海地震」とも言われます。この地震については、宿毛市の浜田家に「甲寅大地震御手許日記」という記録があり、当時の地震とその後の様子をうかがい知ることができます。なお、嘉永7年の地震では、津波は大島のはいたか神社の石段7段まで上がったことが記されています。さらに宝永4年(1707)地震の津波はそれ以上に大きく、石段42段の高さにまで達したことが記録されています。

アクセス はいたか 鶴神社

- 土佐くろしお鉄道宿毛駅より南西へ直線距離約2km
- 宿毛市大島
- 緯度経度 北緯32度54分57秒, 東経132度42分13秒



嘉永七年(一八五四)十一月五日、空はよく晴れ、寒気も厳しい朝でしたが、昼からは暖かく、よい天気でした。夕日が片島の上に落ちようとした時に、突然大地震が起こりました。

この後、日没までに二回、夜中に七、八回も地震があり、宿毛の町の家は、大半つぶれ、その上に火災が発生して、大変な騒動さわごうとなっていました。家が潰れる度に土煙があがり、人々は火事だと騒ぎました。しかし、津波が来るといつて皆が騒ぎ出したので、火を消そうとする者もなく、宝物一つ取り出す者もなく、皆が一目散に山上へ逃げ上がりました。

そのうちに、大きな潮音とともに津波が押し寄せ、八反(約九〇メートル)の大堤を通り越え、一丈(約三メートル)程も水田の中に潮が入り、日の入り頃までに宿毛の町の中にまで潮が来ました。この津波の騒ぎで、人々は山上に逃げており、出火をしても消すものもいなかったため、火勢はいよいよ盛んになり、本町、真丁、牛の瀬、沖須賀、仲須賀の大半は焼けてしまいました。

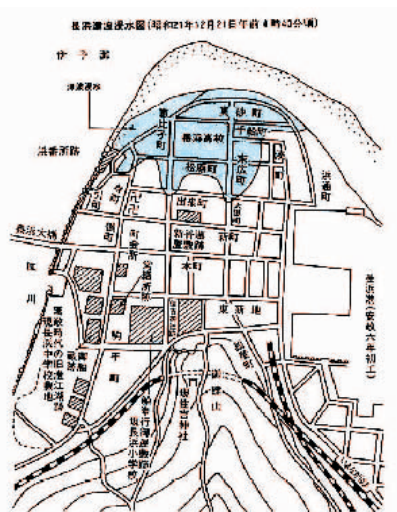
大島は四日の朝、小地震(注:安政東海地震が十一月四日に起きている。)で潮が差したので、注意していたため怪我人はありませんでしたが、津波ははいたか神社の石段七段まで上がり、洞泉寺の障子端まで来ました。潰れた家は極めて多く、流れた家は一三、四軒でした。

六日も何回か小地震があり、津波も来ましたが、町の入り口までで大したことはありませんでした。

七日の昼過ぎ、かなり大きな地震があり、小地震は何回もありました。人々は和守神社みこもりの付近に仮小屋を建てて夜を過ごし、殿様は人々に炊き出しを行いました。夜中にも何回かの小地震があり、津波も来たので、人々は安心して眠ることができませんでした。



▲昭和南海地震で浸水した肱川河口部 (大洲市長浜町)



▲昭和南海地震による津波の浸水記録
〔「災害予防と防災知識」より引用、加筆〕

背景

東南海・南海地震により発生した津波は、日向灘ひゅうがなだを通り、佐田岬を回りこみ、瀬戸内海に入ってきます。中央防災会議のシミュレーションによれば、東南海・南海地震により四国の瀬戸内海沿岸部で、高いところで2~5m程度の津波が来襲することが予測されています。昭和21年(1946)の南海地震は、徳島県や高知県などの太平洋沿岸らいしゅうに大きな津波被害をもたらしました。ところが、その被害があまりにも大きいため、瀬戸内海の津波が取り上げられることはまれです。

アクセス 長浜港

- JR伊予長浜より西へ直線距離約200m
- 大洲市長浜町長浜
- 緯度経度 北緯33度36分56秒, 東経132度28分56秒

昭和南海地震では、津波により太平洋沿岸で甚大な被害が発生しました。津波は佐田岬を回りこみ瀬戸内海沿岸にも来襲しましたが、その記録は多くありません。これは、愛媛県大洲市長浜での津波の浸水の様子を当時学生であった人が記録した貴重な記録です。

昭和二十一年(一九四六)一月二二日の午前四時過ぎ地震が発生しました。汽車で松山へ通学していた私は、いつも起きる四時過ぎに玄関へ出てみると、家の前には潮がさして、水深三〇〜五〇センチメートルがありました。

通学のために家を出るのは、五時一〇分頃なので、朝食をすませて五時頃に、長靴をはいて表通りへ出てみると、やはり路面上二〇センチメートルはあります。静かに潮位が上がった感じでした。五時過ぎ駅へ向かおうと、遠まわりして潮が引いていると思われる道を選んで駅に向かったのです。

この潮位が一メートル上がった記録がどこにもないのが不思議です。それによる被害の話も聞いておらず、網納屋で網が濡れた程度です。

学校から帰って一人で歩いて痕跡調査をしました。町のあちこちに潮が来ていたことが分かりました。氷屋の証言から、実際には長浜港沿岸にも潮が上がったことが分かりました。

昭和30年代以前



▲現在の五剣山



▲宝永南海地震以前の五剣山の山容
〔四国霊場記〕より引用

背景

南海地震、東南海地震、東海地震の3つの地震が同時に起こった日本史上最大といわれるM8.6の宝永地震の大きさを象徴する痕跡が香川県内で有名な山に残っています。

それが、私たちが普段見慣れている五剣山で、宝永地震により東の峯が崩れて、今では「四剣山」になっています。今後30年間で高い確率で発生するという東南海・南海地震も、我が国で発生する最大級の地震であり、その地震動による被害は、香川県でもこのような甚大なものになると想定されています。

アクセス 五剣山

- 琴電志度線六万寺駅より北へ直線距離約2km
- 高松市庵治町・牟礼町
- 緯度経度 北緯34度21分41秒, 東経134度08分27秒

香川県高松市牟礼町に空海が唐に渡る前、八つの栗を埋めたことから命名された四国霊場第八十五番札所・八栗寺があります。この八栗寺の背面にそびえる山は、もともと五つの峯があることから「五剣山」と名付けられていました。

宝永四年（一七〇七）は天変地異の多い年でした。三月一日には大地震が発生し、七月一〇日にはほうき星が月を横切りました。八月一二日に大雨、一七、八日は大風雨で洪水、一九日は大風でした。九月一二日は大洪水で、庵治の海岸の堤防が切れ、家が倒れ、田畑が流れました。そして、一〇月四日のことです。旧暦の一〇月は今の十一月頃ですが、それなのにこの日は大変暑く、人々は着物を脱ぎ、笠をかぶって綿を摘んだり、稲を刈ったりしていました。

午後二時頃大地震があり、地鳴りは雷のようで、地は裂け、水が湧きだし、浜辺の砂地は音を立てて揺れました。五剣山の東の端、庵治から左の端に見えていた峯が崩れ落ち、その音は二〇キロメートル余り遠くまで聞こえました。家は倒れ、塀が壊れ、井筒が跳び出ました。その上、二メートルほど津波が押し寄せたので、海岸一帯は潮に洗われました。

地震がいつまでも続き、人々は「また大地震が来る、大津波が来る」と言って、山や藪の中に小屋をつくらせました。一〇月二三日には富士山が噴火して宝永山ができました。

八栗寺はこの地震で大破し、二年後に全部改築して、ほぼ現在の姿になりました。